第1回

前半

＜あいさつ＞

みなさんおはようございます。え〜梅雨に入りましてちょっと鬱陶しい日が続きますけども、外でお仕事なさる方は大変な時期に入りますけども、まぁ、健康に気をつけて頑張ってもらいたいと思います。今日は新入社員の方も何人かいらっしゃるということなので、一応社会に出て、社会人となって、仕事をしていく上で基本的に大事かなと思えるようなそういうこの課題についてお話しさせていただきたいという風に思っております。え〜一応、仕事と人生というテーマでお話しさせていただきたいと思います。まぁ、学校を出て社会人になると言われるわけですけども、あの〜学校を出ても社会に出ても仕事というものを持っていなければ社会人ではないんですね。仕事をもってはじめて社会人という風に呼ばれるようになります。まぁそういう意味では、この社会の中で仕事をしていくためには、生きていくためには、まずその仕事とは何なのかという職業観と社会とは何なのかという社会観とそれからこの仕事というものは対お客さんとの関係においてもですね、多くの方々と人間関係を持ちながら仕事していかなきゃなりませんので、そういう意味では確たる人間観という、3つの観と申しましょうか、職業観と社会観と人間観、これがですね、社会の中で仕事を持って生きて行くそういうことのために基本的に重要な課題であると考えらえれる訳であります。

＜職業観＞

そういうことで、まずこの仕事をしていく上でですね、どういうことが大事なのか、職業観ということからお話しをしていきたいと思うんですけど、社会の中で仕事をしていく上で最も基本的に大事な精神というかね心構えというのは、まず人を幸せにするということが一番に求められることであって、職業とは人を幸せにすることによって自分も幸せになる活動のことを職業と言います。職業というのは社会において成り立っている訳ですから、当然この対お客さんという多くの人との関係が出てきますけれども職業というものにおいて、一番大事にしなきゃならんことは、人を幸せにする力をつけるということなんですね。ついつい自分の幸せを先に求めてしまって、自分が幸せになるためにという風に仕事というものを考える方もいらっしゃると思うんですけども、まず自分が幸せになりたいと思うとどうしても自分を優先してしまって自分の幸せのために人を犠牲にするという結果になってしまう場合が多い訳であります。だけど、人を不幸にしてしまって自分が幸せになってもですね、人に損をさせて自分が幸せになってもそれは一時のものであってですね、結果として人が不幸になれば、結果として自分に返ってきてしまって自分も不幸になってしまうというね、そういうことになってしまいます。家族、家庭においても家族を幸せにしないとそこの主人は幸せな気持ちで生きていくことができないというね、そういうことになります。そういう意味でもとにかく社会というものの中で仕事をしていく上でまず大事なことは自分の幸せというものも大事なんだけど、それ以上に人を幸せにしないと自分は幸せにならないんだという、そういう気持ちを持って仕事をしていくことが大事なんじゃないかと思います。人を幸せにすればその感謝のしるしに、やはりお金が入ってきて、そしてこの会社も発展し、自分も幸せになり、家族を養えて、家族に喜ばれて幸せになれるという、そういう循環が生まれてくる訳ですね。会社、社会、会社、社会、そういうこの循環が社会の中で仕事をしていく上での基本的な方程式というかね、システムであります。まず仕事というものは人を幸せにすることによって自分も幸せになる活動であるということを心得てね、仕事いうものはしていかなければなりません。人を幸せにする力つくということは、その力がやがて必ずこの自分を幸せにする力に影響してきて、そして、自分にも幸せな春がやってくるみたいなね、そういうことになっていく訳なので、この順序っていうものはやはり間違えないようにしないと、幸せを求めながらも人を不幸にし、自分をも不幸にしてしまうような人生を歩んでしまうような人も随分と多い訳であります。その次の考えておかなければならないことですけども、え〜仕事も目的というものをやはりちゃんと意識していけないと。多くの人は仕事っていうものはお金を手にいれるために、お金を獲得するために仕事をするんだという、そういう心づもりというかね、そういう常識というものが、一般的にね、あるように思うんですよ。やっぱり仕事っていうものは生活するために金を獲得するためのものだという、そういう常識で仕事をしていらっしゃる方も多いと思うんですけど、だけどお金を目的に仕事をすると、人間は結果として、この悪がしこい人間になってしまいます。お金を目的に仕事をすることによって、利害打算というものを考えた、そういう仕事の仕方で儲からなければ仕事をする気にならない、儲かればなんでもするというような仕事になってしまって、本当に人に喜んでもらえるような、人を幸せにするような仕事、そういうような気持ちがなくなってしまうって、だんだん儲かるような仕事ということを考えてしまって、人に損をさせるようなこともありますし、そういう意味ではこの人間関係においてですね、何かこう作為のある悪がしこい生き方っていうのはついつい出てきてしまう結果になりやすいんですよね。しかもこう、金に支配され、金に動かされ、お金に左右されるというね、金で動かされるような、そういう人間になってしまって、人間としては何かこう情のない、心においてもちょっとこう汚れたようなというかね、あまりよくない人間性が出来てしまう訳であります。こういうことであったんでは、やはり社会において他人から軽蔑されてしまってですね、仕事はよくできてもですね、人間性が悪いというね、そういうような状態になってしまうことが非常に懸念されます。だけどやっぱり仕事をしていく上では、お金は大事なことであって、どうしてもお金を儲けなればならないし、自分が生活していく上でもお金は必要ですから、お金っていうことは全然頭の中で考えないで人のためだけにやるのはこれはボランティアになってしまいますから、社会の中で仕事をしていくということにはならないと思います。経済社会の中で仕事をしていくということは結果としてお金はちゃんと儲けなければならない。だけどもお金というものをまず優先させればですね、必ず人間性は汚れるというかね、あまりよくない人間性になってしまって、金に支配されて、金に動かされるというね、そういう心ないことになってしまうと。そういうことを考えると我々は仕事をしていく上で何のために仕事をしているんだという風に考えることは、まぁこれは職業観として常に問題にされる課題であります。そもそも職業というものがですね、どういう風な原理で成り立つものなのかということを考えていきますと、やはり仕事というのはまずはですね、人に喜んでもらえるような仕事の仕方をしないとお金は入ってこないという順序なんですよね。まず人に喜んでもらえるような仕事をする、人に感謝してもらえるような仕事の仕方をする、そうすると相手は喜んでくれて、そしてその仕事の報酬というものがですね、ちゃんとこう約束通りに入ってくるということになってきます。人に喜んでもらえないような仕事の仕方をしておりますと、結果としてやり直しをですね、命じられたり、あるいは相手に何かしら損害を与える場合には、損害賠償を求められたりという、そういうことになってしまって、結果として仕事にならないというかですね、人に喜んでもらえないような仕事に仕方をしていれば、会社は潰れますし、あいつには頼まないということになってきて、仕事がなくなる。これでは仕事にならない訳ですよね。まずお金の前に仕事のことで考えなければならないことは、人に喜んでもらえるような仕事の仕方をするっていうことが、仕事においてあらゆることにおいて優先するということなんですね。そのことを考えるならば、我々はまず仕事というものを通してね、何を目的にするべきなのか、まず仕事をする上で人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った本物の人間になろうというね、そういう気持ちをまず持たないと職業人としてはですね、一人前にはなれないということですね。理想を言えばですね、この職業人というのはその仕事のプロですから、だからプロっていうのはお客さんから見て、さすがプロですね〜と言ってもらって初めて客は快く金を出してくれると。お客さんに快く払ってもらって、快く金を出してもらって、お金を払いながらもありがとうと感謝してもらえるというね、そういうこの仕事人になろうと思ったらですね、やっぱり客にさすがと言わせなきゃならないと。客にさすがと言わせないようでは堂々と金はとれんというのがですね、この社会で仕事をしていく場合の、プロとしても一応の常識みたいなものですね。だからある意味ですが全社員がやはり仕事をしていく上はお客さんにさすがと言わせる、そういうこの仕事ができる人間になろうということは、これはもう入社当時からですね、この仕事の目標として、やはり全社員が常に心に持っていなければならない職業人としての自覚、目標という風にですね、言うことができると思います。やはりさすがと言わせて初めてプロ。さすがと言われないような半端な力でですね、金をとろうなんて話はおこがましい話。仕事っていうものの仕方において考えなければならないことであって、やはりこう自身を持ってですね、誇り高い仕事をしていこうと思ったら、やはり素人であるお客さんにさすがと言われて初めて堂々と金がもらえるという、やはりこの意識はなくてはならないですね、大事なものであります。そういう結果として金が入ってくると、だからお金っていうのはやっぱり、仕事というものが社会の中で行われていく場合にですね、実際に第2番目の目標というかね、後から金がついてくるのであって、初めから金が入ってくるんじゃないと。まず仕事をしてから金が入ってくると。その仕方ってものが、お客さんに喜んでもらえて、初めて客は金を払ってもんだと。だからお金を目的に仕事をしたんでは、人との関係性、人と関わりながら仕事をしていくという仕方においては本末転倒であり、優先順位が違うということをちゃんと分からなければならないと。まぁとにかく仕事というものは、人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った本物の人間になるために仕事はするものだと、それができれば必ず金は入ってくる。そういう順序というものがですね、仕事にはあるということなんですね。ということは、何のために仕事をするんですか、と問われたらお金のためではない、自分を本物の人間に鍛え上げるために、本物の人間に成長させるために我々は仕事というものをしているんだ、仕事をしていなかったら人間は本物にはならん。それほどの自覚っていうものが職業人には必要であります。なんで仕事をしないと社会人として本物にはならないのか。

＜職業観・重要なことその①　謙虚さ＞

仕事をするということが人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った人間をつくるといういうですね、そういう働きをしているということなんですけども、仕事をしているとどういう風にして人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性がつくられていくのかということなんですけどね、まず仕事において成功して、仕事において客に納得してもらって、感謝してもらえるというですね、そういう仕事をしていくためにはですね、基本的に3つの条件というものが出てきます。まず第1番目に大事なことは、謙虚さですね。やはり傲慢な態度、傲慢な目つき、傲慢な表情、傲慢な物言いというのは、一番これは人間として嫌われるタイプであります。人間というのは基本的に不完全と言われている訳で、どんな完璧な仕事をしようと思っても、なかなか完璧にはいかないで、どこか足りないところ、欠けているところというのは出てきてしまうのがですね、仕事をする上で避けがたい宿命です。どんな技術・能力を持っていても自分がやったことは完璧であって、絶対批判なんかさせへんぞ、とそういう気持ちがあったとしても、やはり人間のすることはどこかに欠けているところがあるというね、問題点や短所・欠点があることを忘れないようにしないと、ついつい傲慢な態度で客に接してしまうことがついついある訳であります。以前、三菱自動車なんかでですね、客からクレームが来た時に、三菱自動車がですね、我々の技術には全く問題がないと、不都合が生じたのはその車を使うお客さん側の使い方に問題がある、我々には問題がないとつっぱねたんですね。これがもうたちまち大騒ぎになって、客を馬鹿にしているというね、まぁそういうことで、本当に潰れそうな状況になってしまった。そこで全社的に反省しちゃったりなんかして、どういう風に反省したかというと、使い方に問題があるにはあるんだろうけど、やっぱり技術者としてはね、どんな使い方をされても全く問題が起こらないようなね、そういう強固なですね、そういうものを提供するのが技術者として大事なのであって、使い方が悪いと具合が悪くなるようなそんな半端なものを作っとったらいかんやないかという、そういう反省が全社的におこってきて、そして客がいかなる使い方をしようともですね、大きな問題、不都合な問題が起こらないという、そういう技術を完成させていこうという、そういうことになってようやくこの社会が三菱自動車の反省を許して、再び現在、よやく正常な会社に復活した訳であります。技術者の傲慢な態度というものがですね、消費者から総スカンをくったと、俺たちには問題はない、客が悪いんやというね、これではやっぱり技術者としての自覚というものがですね、疎い、人間のすることには必ず問題点がある、欠陥がある、完全ではない、絶対ではない、そういう自覚があったならばですね、ちょっとでもクレームが来た場合にですね、そういうこともあるかもしれないという反省をして、そしてこの客からの要望・要請・批判というものを甘んじて受けてですね、そしてこのそういうクレームや文句の出ないような、そういう状態の能力を作るために俺はもっともっと頑張ってですね、成長しなければいけない、このまま放っておいたら会社はつぶれる、そういう試金石ができるということになる訳ですね。まぁとにかく人間にとって仕事をするうえで一番大事なことは、謙虚さです。やっぱり傲慢な目つきというのは一番嫌われる、傲慢な態度、傲慢な物言い、パワハラのような会社の中で地位を重ねてきた人が言うことについて問題になる訳ですけども、やっぱり人間としては、職業人としては恥ずかしい姿であります。傲慢さほど恐ろしいものはない。傲慢さほど嫌われるものはない。傲慢さほど醜いものはない。傲慢になった時、人間は人間であることを根底から失格するのです。人間じゃないんです。人間は不完全だからどんなに完璧にしてもどこかに問題点、欠けているところがあるのが当然であって、全く問題はないと、そういう気持ちになった時にどうしても傲慢さが出てきてしまって、慢心が出てきて、自分には責任がないと言って、何か問題があったら責任転嫁して人を責めるような、そういう醜い人間になってしまう訳であります。とにかく仕事をしていく上で何かしら注意をされたり、叱られたり、批判されたり、クレームを受けたりした場合、それはやはり謙虚に甘んじて、そういう問題が生じないようにさらに努力をし、技術においてももっと高度な技術を発展させていかなければならない。そういう思いになることがプロとしての仕事、社会の中で仕事でしていく上で大事なことであって、批判を許さない、人から責められることを嫌うというよう傲慢な態度というのは、これはもう職業人として決してあってはならないですね、最も大きな欠陥であります。とにかく謙虚さのない人間は、成功することはない。

＜職業観・重要なことその②　成長意欲＞

2番目に大事なことはですね、成長意欲ですね。人間としてもっともっと成長したい。人間としても成長は、能力の成長と人間性の成長と両面の成長がある訳なんですよね。本当にお客さんに喜んでもらえるような能力と人間性を作っていこうと思ったら、やはり机上の空論としての、どうしたらお客さんは喜んでくれるんだろうか、あるお客さんは自分のやり方で喜んでくれても他もお客さんは自分のやり方では喜んでくれないということも必ずありますからね。人によってはやっぱり喜びの度合いや、どういうことで喜ぶのかは違ってきますから、実際問題、仕事をやってみないとわからないというのが現実のですね。仕事の世界であります。どうしたらお客さんは喜んでくれるんだろう、どうしたらお客さんが納得してくれる人間性になれるんだろう、人間としてもっともっと成長したい、人間性においても成長しなきゃならない、どう成長すればいいんだというのをですね、本当にちゃんとわかろうとするなら仕事せんとバーナードと申しましょうかね、仕事をせんと分からんのです。せんとバーナードというのはこれはギャグでですね、つまんないおやじギャグですが、私も今年で76歳になりましたのでね、おじいちゃんギャグでですね、仕事をせんとバーナードと言って笑ってもらおうと思っているので、笑ってもらわないとなんか肩透かしをくらったような気持ちになって、ちょっとこう気分が乗ってこないんで。まぁ、とにかくどういう風にすれば本当に客に満足し納得してもらうことができるだろうかということはやってみないと分からないということですよね。ということは仕事というものは結果が勝負なんです。結果が出るまで本当にそのお客さんが満足し、納得し、喜んでくれたという証拠が出てくるまで何回も何回も繰り返し繰り返し、ああしてみたらどうだろう、こうしてみたらどうだろうといって何回も繰り返し繰り返し努力して、ようやくそのお客さんが喜んでくれたという結果が出て、初めてその仕事は実力という風に言われる段階に入る訳で、それまでは試みというか色々やってみるというか修行の段階なんですよね。お客さんの態度や物言いに、満足に結果が出て初めて、俺も結果が出せる一人前の自立したプロとしての職業人になれたというね、自信がだんだんとついてくるという訳であります。だから仕事というのはやっぱり、10年くらい続けないとですね、いろんなことを体験することはできないんです。4,5年で辞めてしまうようでは、半端な状態で、どこへ行っても役に立たんと。やっぱり10年やって一人前というのはどんな職業でもよく言われていることであります。10年くらいやっていろんなお客さんを知らないと、本当に社会においてどんな人にも満足を与えることができる、結果が出せる、そういうこの職業人にはなれない、さすがと言われる職業人にはなれない。だから10年くらいやらんと本物にはならんという風にですね、考えておかないとならないと思います。まぁとにかく仕事で成功しようと思ったら、まず謙虚さがないと成功できない、また人間としてもっともっと成長したいと思ったら意欲がないと成長できない、成功もしない。これでいいわと思った瞬間に、その人間はもういらん人間ですね、もう役に立たん。会社を発展させることはできないし、成長意欲がなくなってしまったら、だんだん仕事自体がつらくなってきてね、結果としては不平不満を言って辞めてしまう。どこまでも成長意欲があってですね、高度な力を身に付けたい、もっともっと厳密な仕事ができる人間になりたいという、そういう気持ちなないとですね、仕事というものは続きませんし、仕事をしながら自分が成長するということはありません。仕事をしている限りは成長意欲というものを持ち続けていることが大事であって、現実というものは常に動いていますし、同業他社と常に競争の関係にありますから、ちょっとでも気を抜いたら同業他社に抜かれてしまって、競争に負けてしまうということになってしまいますから、本当は一瞬たりとも気が抜けないというのがプロの職場の現実だと思います。そういう意味で何らかの点でちょっとでも成長しているということが大事である、今日１日生きたら、今日１日生きた証というものが成長の中になきゃおかしいと、今年1年生きたら今年1年生きたなりのですね、成長の証というものを確認しながらですね、それを毎年毎年積み重ねていくというのはプロの仕事なんですよね。確実にそういう風にして毎年毎年、去年まではこれができなかったけど今年はこれができるようになったというね、去年まではこういう人間関係で悩んでいたけど、今年はこういう問題が起こってもちゃんと人間関係を修復して、ちゃんと悩まずにやっていけるようになったよねと、そういうこの成長がですね、1年1年ちゃんと確認されてですね、こう積み重ねられていくと、この1年で俺はこんなに成長したなぁと自覚できるようになってくるんですね。まぁとにかくそういうことで成長意欲のない人間というのは、これはもう職業人としては失格であります。とにかく職業人であり続ける限り成長することが大事であって、でないと会社も発展しません。成長意欲のない人間は絶対に仕事で成功しません。

＜職業観・重要なことその③　人間関係＞

最後に3つ目は何なのかというと、職業は社会において成り立つものでありますから、社会というのはたくさんの人と関わっていく、たくさんの人と関わりながら仕事をしていくというものなので、社会の中で生きようと思ったら人間関係というものをさばいていく力が要求されてくる訳であります。いろんな考え方の人がいる、いろんな価値観の人がいる、いろんな要求を持った人がいてですね、本当にこう人さまざま、そういう人たちと生きていかなければならない、そういう意味では社会性というかね、誰とでも付き合っていける人間性の豊かさというものがね、職業人においては求められくると。特に会社の中でも地位が上がって部下が増えてくれば、いろんな性格の人を率いて統率して仕事していかなきゃなりませんから、こいつとは合わんというようなことを言っていたら、仕事にならんというかですね、仕事の能率が落ちてしまってですね、ちゃんとした仕事ができませんから、誰とでも心を合わせてちゃんと付き合っていける人間性の大きさですね、そういうものが求められてくると。社会は人間関係で成り立っていますから、そういう意味では相手に対する思いやりですとか心遣いとかですね、そういうことをしていかないとこのお客さんを満足させることはできませんし、社内で同僚と共に仕事をしていくというのも心遣いや思いやりというのもある程度要求されてきます。最近は人間関係が苦手と、パソコンが使えたらいいやとか、携帯でゲームばかりしているとか、そういう風な感じで直接の人間関係というものが鍛えられていないので、人間関係が増えて、あんまりちゃんとした心遣いとか思いやりなんていうことは、苦手だという人は案外多いものなんですけど、それではやっぱりですね、社会の中で人間関係というものを持って生きて行くとすれば、非常に問題のあることだと思います。やっぱり思いやりや心遣い、一言で言えば愛というものなんですけど、他人に対する思いやり、心遣いとというものができて初めて人間関係というものがですね、うまくいく訳ですよね。人間関係で悩んでいる人は、本当に多いです。現実的には考え方が合わないとか、価値観が違うからあの人とは仕事ができないとか、性格が合わないとか、問題点が出てくるということが、社内では、人間関係をうまくやっていく、人間関係をつくっていく力がないと、この社会で仕事をしていくことは辛くなりますし、対お客さんとの対応においても人間関係のトラブルが出てくると仕事もうまくいかなくなる、そういう意味ではやはり仕事において成功する人っていうのは、素晴らしい人間関係をたくさんつくるという能力がどうしても求められてくる。俗にいう愛の力と言うんですけれども、この愛というものは、人間関係の力と呼べるもので、人間関係は全て愛によって成り立っている、人間関係の問題を処理していくためには、できたらやはりこの愛に力を成長させなければならない、まだまだ現実社会ではこの愛というのが感情的なものであり、情緒的なものであって、愛は自然発生的なものだというに考え方をしている人が多くて、能力と考えて、愛の能力を成長させようという気持ちはまったくまだないんですよね。だけど今多くの人が愛に悩んでいる、人間関係で悩んでいる、これは個人的な問題ではなくて全世界的に人倫の崩壊といって、人間関係がずたずたに切り裂かれていってしまっているのが現実の世界だと言われている。これが離婚の激増とか幼児の虐待とか高齢者の虐待とか、宗教戦争、民族戦争、人間同士のいがみ合い、対立といったもので人類は皆苦しんでいる。愛の素晴らしさをわかっているけど皆、愛に悩んでいる、愛に苦しんでいる。親子の関係でも悩んでいる人はいっぱいいますよね。すべての人が何らかの人間関係で悩んでいるというのが現実ですから、この問題を乗り越えていかなければ、人間は幸せにはならないし、そもそもこの問題を処理して乗り越えていく力をつけていかないと、仕事もうまくいかんということにね、なってくる訳ですよね。そういう意味ではこの愛というものをね、いつまでも情緒、感情、本能、情熱というね、そういう自然発生的な状況のままで放ったらかしにしておいたらいかんと、愛というものを能力と考えて、愛の能力を成長させていくことによって愛に実力をつくって、どんな人間関係でも自分の力でさばいていく、乗り越えていける力を作っていかないとですね、人間関係の中で成り立つ社会の中で、仕事における成功という結果を出すことは難しいんじゃないかというふうに考えられます。ぜひそういう意味で愛をいうものをぜひ能力と考えてほしいと、能力と言ったら理性という風にね、考えている人は多いんですけど、だけど人間関係の問題というのは、これは理性ではなんともならん問題なんですよね。心遣いとか思いやりとかそういうものが関係してきますので、理屈を超えた愛の能力なしには人間関係という問題を乗り越えていくことはできません。そういう意味では仕事で成功するためには愛の能力を磨いて、愛の実力を作っていくということをすれば、離婚の激増も止まるであろうし、幼児の虐待も防げるであろうし、高齢者への虐待も防げるであろう、いろんなですね人間同士の人間関係ももつれ、悩み苦しみというものを乗り越えていく力を持つことができるといえる訳ですね。ではこの人間関係の破綻というか人倫の崩壊ということを乗り越えてですね、いろんな人間と仲良くやっていく力というものをですね、作っていくということを考えていくと、どういうことが必要になってくるか、今はとにかくあれですね、価値観が違ったら一緒に仕事ができるはずがない、そうだよねって言ってますし、考え方が違ったら一緒にやっていきにくい、だから考え方が違うやつは排除するという感じでですね、仕事は進んでいるんですね。同じ考え方の人間と一緒にやっていったらいいというね、そういう思いが非常に強い。だけど同じ考え方の人としか一緒にやっていけない、同じ価値観の人としか一緒にやっていけない、という状態というのは、人間が理性に支配されているがためにそういうことになってきます。理性は違う考え方を排除するから、また理性は確率性を追求するから同じじゃないといけないとなってくるから、これでは違う考え方の人とはやっていけないという風になる。理性的な考え方の人というのは、自分と同じ考え方の人としか生きていけないという人なんですよね。だけど理性的な人というのは一部分じゃなくて、今は全人類が理性的な人なんですよ。今は全人類が理性の奴隷なんですよ。ほとんどの人は考え方が違ったら一緒にやっていけないと、そういう人間性になってしまっているんですね。だから宗教戦争は起こるし、民族戦争が起こる訳ですね。だけど自分と一緒の考え方の人としかやっていけないという人間は、愛で考えたらね、自分と一緒に考え方の人としかやっていけないという人は、自分しか愛せない人間なんですよ。自分のことしか認められない人間で、自分と違うものは否定する人間なんですよ。自分と違う考え方や価値観の人は敵だと意識し一緒にやっていけないと、考え方しか認めない、自分の考え方しか許せないという人は、自分と違う考え方の人をなくそうとする、どうにか説得として自分と同じ考え方に導こうとする、自分と違うものを抹殺しようとする、そういう恐ろしい意識を持ってしまっている訳です。とにかくまず考えてみてもらいたいのは、自分と同じ考えの人としかやっていけないと考えている人は、自分しか愛せない人間なんだ、自分しか愛せないような愛は、偽物の愛だ。自分しか愛せないような愛でどうして子孫を残せようか。愛というのは本来、子孫反映の欲求から湧いてきたものであって、愛は男が女を愛し、女が男を愛するという構造が基本となってできている訳です。愛というのは自分と違うものを愛するというところにですね、愛の本質がある、愛の原点がある、そのことを考えたならば、自分のことしか愛せないのは、これは理性によって歪められた愛であって、真実の愛ではない。仕事で成功しようと思ったら、違う考え方の人とも一緒にやっていかなくてはいけないし、価値観が違う人とも一緒にやっていかなくてはいけない。そうしていろんな人を統率していくという力を作っていかなければならない。ということを考えたら我々は愛というものを理性の支配から解き放って、本当の理性を超えた愛の能力というものをつくっていかないと、人間関係を素晴らしいものにしていくのは難しいということがわかってきます。本当に仕事において成功したいと思ったら、我々は愛の実力をつくるという、そういう発想でこれから愛というものを考えていかなければならないということになってくる訳ですね。まぁとにかく自分と同じ考え方の人と一緒にやっていけない、自分と価値観の人としかやっていけないという人は、自分のことしか認められない、自分のことしか許せない、自分しか愛せないという愛は偽物の愛だ。このことをですね、ちゃんとわかってもらって、そして我々は偽物の愛と離れてですね、自分と違う考え方や価値観や、自分と違う民族でもですね、排除しないで仲良くやっていこうと思うという気持ちをですねやはり作っていかないとこれからの時代、これから個性の時代と言われていますからね、考え方も価値観も宗教も違ってもいいという時代になってくる訳ですので、お互い個性を認め合いながら許し合いながら、理屈を超えた生き方ができるという状態にもっていかなければならないという訳ですね。

＜職業観・重要なことその③　人間関係／考え方の違う人間と一緒にやっていく方法＞

ではどうしたら考え方の違う人間と一緒にやっていけるのかというと、またちゃんと考えていかないと愛の実力はついてきません。どうするかということですけども、考え方が違うということはどういうことなのかということなんですけども、考え方というものは生まれてから後天的に作られるものであります。生まれながらにして考え方が違うと言ってむかついて生まれてくる子どもはいませんからね。生まれたときは絶対的な信頼を持って一点も曇りもない状態でですね、本当に清らかな瞳と清らかな心をもって皆生まれてきます。生まれてから後に考え方が違ってきたり、価値観が違ってきます。じゃあ後天的に一体どういうことが原因で考え方や価値観が違ってくるのかということですが、その原因は5つしかないんです。まず、体験が違ったら考え方が違う。経験が違ったら考え方が違う。持っている知識・情報が違ったら考え方や価値観も違う、物事も解釈がプラスかマイナスかでその人の考え方が違う。また、人生にとって出合いというものは色々あってですね、どんな事件と出遭ったか、どんな事故に出遭ったか、どんな犯罪と出遭ったか、どんな災害に出遭ったか、どういう本に出逢ったか、どういう人と出逢ったか、そういう出合いの違いによっても考え方や価値観はガラッと違ってきます。とにかく考え方や価値観が違ってくるという原因は、この5つしかないんです。ということは、考え方が違うから嫌になるんだ、敵だといいうことは、自分にない体験を相手がしている、自分とは違う知識を持っているということなんですよね。対立の原因というのは相手と自分との体験が違う、だから考え方が違ってくる。敵というものは自分にないものを相手が持っているということ。だから同じ考え方の人間というのは、だいたい体験や知識も一緒なんですよね。よく似ていて考え方が合っているんですよね。同じ考え方の人間と一緒にいたら楽しい、愉快で気楽であまり苦労もない。ついつい一緒にいるということになってしまうんだけども、同じ考え方の人と一緒にいてもどんだけ付き合っても成長はしないんですよね。成長をしようと思ったら誰かから学ぼうとしないと、本人は成長しません。考え方が違うということは俺にはない何かを相手が持っているんだということですからね、だから考え方の違う人というのは、結局、薬局、郵便局と申しましょうかね、自分にないもの、自分が成長するために学ばなければならないものをもっている人間が、今俺の目の前にいるんだということが対立の現象なんだと、そういう風に対立を理解することによって、我々は敵を敵対心を持ってみるのではなく、今俺はあいつから学ばないといけないものがあるんだという気持ちでね、相手に対峙するということができるようになってくる。これはものすごく大きな成長であります。これだけで相当その人間は大きくなっています。嫌な奴だという目で見ているのと違って、俺はこいつから何かを学ばなければいけない、俺にはないものを相手は持っているんだなと、いったいあいつは俺にはない何を持っているんだろうと、相手を見る目が違ってきますよ。この自分が相手を見る目の色の変化がですね、相手の心に感応して、相手をこちらに対する態度も変えてくれるんです。人間関係の93%は目で決まるといいますからね。人間関係というのはどういう目で人を見るかによって決まります。批判的な目で見たりあるいは見下すような目で見たり、嫌ななつだといった目で見ていれば人間関係は悪くなります。相手を尊敬するような目で見たり、好きだといったような目で見たりすれば人間関係はよくなっていきます。もっともっと人間関係を鍛えるなら、我々は目をもっと鍛える、目を成長させる、ということをする必要があります。人間関係は目が勝負だ。どういう目で人を見るかによって人間関係が決まる。その目を鍛えるために我々は敵というのは実は俺とは違う体験をしているし、俺にはない知識を持っているし、俺にはない様々な体験をもっているので、俺とは違う考え方になっているんだと。考え方が違うということは確かに嫌なことだけど、だけどよく考えてみたら人間が成長しようと思ったら、やっぱり自分にないものを学ばないかん、敵と言ってもあいつは俺とは違う体験をしているんだから、もしあいつの体験を俺が持ったとしたら、俺の考え方はどう変わるかな、という風に思ったり、ああこういう体験をしているからあいつはこう考えるんだということがわかってくるとですね、考え方が違ってもその考え方の根拠・理由がわかってくるのでね、相手の気持ちがわかる訳ですね。まず対立という状況が出てきたならば、いかなる対立であろうとも、まず対立ということは自分にはない何かと相手が持っているということを教えてくれる現象なんだ、対立という現象は、自分が学ばなければならない人間が今俺の目の前におるということを教えてくれる現象なんだという風に対立を解釈して、自分の気持ちとしては、一体この対立からあいつから俺はあいつから何を学んだらいいのか俺は知りたい、いったいあいつは俺にない何を持っているんだということを知りたい。そういう認識欲を持ってですね、敵に対峙するというね、そういう気持ちがですね、まず人間関係を処理する場合には必要になってくる訳であります。相手がそういう体験があったらこういう風に考えるのも無理はないわなあと、わかってくると、考え方が違っても相手の考えを了解するというか、わかってあげることができるんですね。お互いに学び合えば、だんだんと考え方が近づいてくることもあるし、自分の人間性の幅も広がってきます。考え方が違っても仲良くやっていけるというそういう関係になれます。結果として考え方が違っても価値観が違っても一緒に仕事ができるパートナーシップが組めるというね、人間はそういう状態に成長していけるものなんです。パートナーというのはですね、違うからパートナーになれるので、同じだったら仲間なんです。仲間はどんだけ付き合っても成長しない。パートナーというのはお互いに助け合う関係系なんですね。どんな人間でも不完全ですから、自分の考え方を補うのに必要なんです。どんな人の考え方にも偏りがあり、欠けているところがあるから、相手と協力すれば完成に近づけます。お互いに教えあい学び合わなければならない。本来会社というところはですよ、会社の一人一人が何らかのエキスパートになって、彼らがお互いに協力し合って完成度の高い仕事をしていくっていうのが会社として理想の姿なんです。会社の人間関係は原理的にいうとパートナーシップというものが大事なんです。だからいろんな考え方の人がいて、いろんな価値観の人がいて、そしてパートナーとなって助け合えるというのが会社という組織としての意味であります。だから決して考え方が違っても敵だと思ってはいけない。この考え方の違う人と一緒に生きるという言葉を難しい言葉で言うと、矛盾を生きる力と言います。理性は矛盾を排除すますが、愛は矛盾を生かす力であって、愛ならば考え方が違っても一緒にやっていけるという力が出てきます。だから愛は矛盾を生きる力だ。これから人類が本当に平和を求めるならば、この理性ではできない矛盾を生きる力、この愛の力を成長させていく以外に、真の平和というものを家庭に、職場に実現することはできません。そしてこの矛盾を生きる力が、また仕事において人間を成長させてくれる力なんですよね。人間関係がうまく作れないようでは会社のか発展もとまってしまいます。いろんな人と仲良く付き合っていけるというですね、そういう力を作っていくことが仕事において成功するために欠くこと大事な原理です。ということは仕事というものは人間に謙虚さを作ってくれる、人間としての成長意欲を持たなければいけなし、素晴らしい人間関係をたくさんつくる力を養っていかなければいけません。この3つは仕事において成長しようと思ったら欠くことのできない原理なんですよ。だけどこの謙虚さと成長意欲と愛は、人間の核を作る原理であってね、人間は犬や猫ではないというね、謙虚さと成長意欲と愛は、人間をつくるんですよ、本当に仕事を成功しようと思ったら、人格をつくっていかないと仕事においては成功できない、仕事で成功しようと思ったらひとりでに人格はできてくる。だから仕事というものは、人間に人間の核をつくる活動なんだという風にも言うことができる訳であります。仕事というものは人間に人間の核をつくってくれる、そういう活動なんだ、だから我々は仕事を通してですね、自分を本物の人間に成長させていく、そういう目標をもって我々は仕事というものに取り組む必要があるということです。本当に仕事において成長しようと思ったら、人間の核を持たざるをえないということ。仕事を通して、人間の核を獲得して初めて実力という身についたものになる。仕事をしないで人格、人格と言っていくら論文を読んでもそれは観念的な勉強だけだ。本当に人格というものが実力となって、肉体化され本当に自分のものになるためには仕事をセントバーナードね、肉体を動かして仕事をすることによって人格が身につく、肉化する、そこで何のために仕事をするんですかと言ったら、金のためではない、自分を本物に人間にするために仕事をするんだ、仕事を成功させようと思ったらひとりでに人間の核が必要になってくる、人間の核ができたら必然的にあとから必ず金が入ってくる。これが仕事において成功するためのですね、大事に基本原理だという風に言うことができる訳ですね。